

IOWN[®] × 日立のストレージ

エリアを意識しない、
分散型のストレージによる強じんなITインフラの構築

近年、生成AIの進化が、新たなITシステムへの投資意欲を高めている。
また、電力や土地の確保というハードルがあり、ストレージを含めたデータセンターの地域分散が課題になっている。

複数のデータセンターを利用する上で、こんなお困りごとはありませんか？

システムリソースの有効活用

災害対策やバックアップ用のシステムを
有効活用し、投資価値を
最大化させたい。

データの一貫性

遠隔にあるデータセンター間で
通信の影響によるズレなく
同一データを保持したい。

運用の簡素化

分散化してもシステム構成を
複雑化させず、
運用を簡素化したい。

「Borderless Data Share (BDS)」による課題解決

「日立のストレージ仮想化技術」と「NTTのIOWN APN」で、600kmを超える長距離間でリアルタイムにデータを同期

複数拠点の同時稼働が可能。
ITリソースの最適配置で
投資価値を最大化。

リアルタイムでデータ同期。
低遅延の長距離通信を
実現。

データ同期・復旧の手順を
簡略化。切り替えの
自動化により運用負担を低減。

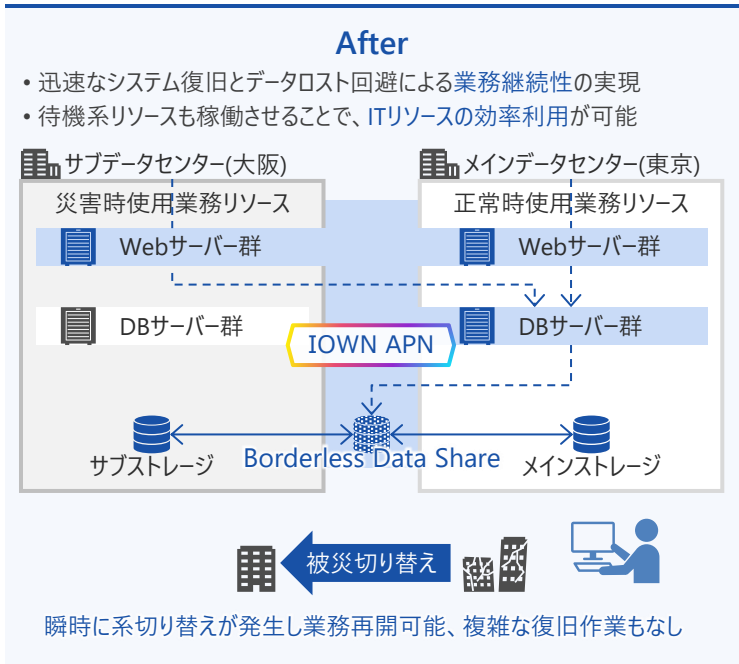
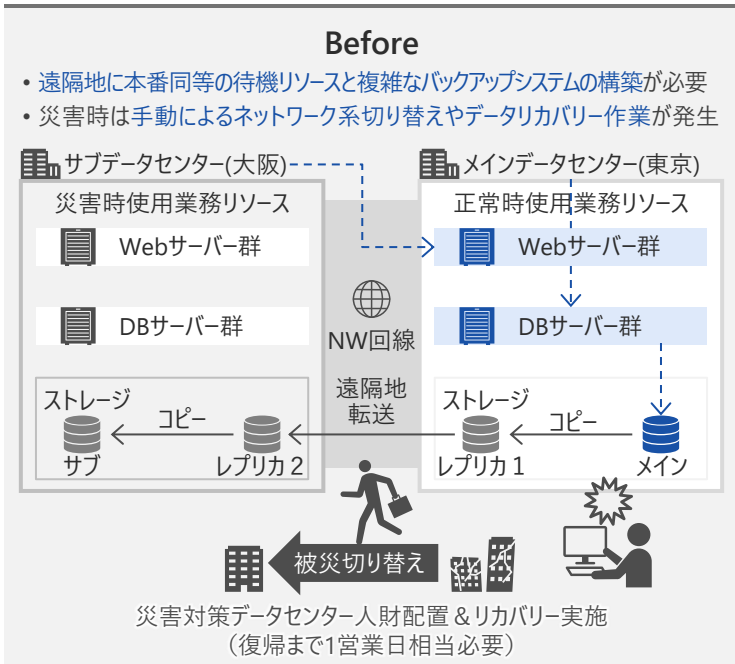
Borderless Data Shareソリューション概要



ディザスタリカバリーへの適用例

複数拠点のディザスタリカバリーにBDSを導入することで、既存のディザスタリカバリーでは実現困難なデータロス回避、迅速な業務復旧を達成し、大規模災害が発生したとしても業務を停止しない強固なシステム基盤を実現することができます。
また、災害発生時の人財配置や災害対策環境の立ち上げなど復旧業務の工数を大幅に低減させることができます。
さらに、災害対策用に待機していた設備を常時稼働させることで、ITリソースをより効果的に活用できます。

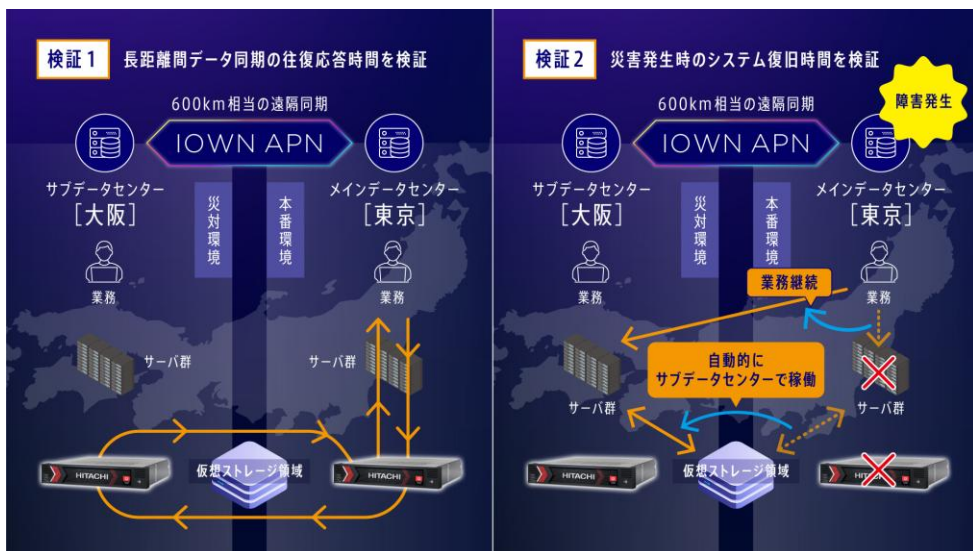
---> 業務の流れ



IOWN×日立のストレージ検証実績

超高速かつ超低消費電力を実現するIOWN構想の主要技術であるAPNを用いて、分散型データセンターの実現に向けた技術検証の一つとして、Hitachi Virtual Storage Platform One BlockとIOWN APNを用いた共同実証を実施しました。長距離間のデータ同期の往復応答時間を、日立が推奨する時間に収めることに成功し、また災害発生時にもシームレスにシステム復旧が可能であることを確認しました。

[世界初、日立とNTT Comがストレージ仮想化技術とIOWN APNを用いて、600kmを超える長距離間のリアルタイムデータ同期の共同実証に成功](#) 【ニュースリリース】2024年12月5日



【共同検証の目的】
600km（東京～大阪）相当の遠隔地点のデータ同期環境にて、応答時間やデータ復旧時間を計測

東京～大阪相当距離をリアルタイムに同期ができることを確認

メインデータセンターが障害発生後、データ損失なく自動的にサブデータセンターでのシステム稼働を確認

構築やアセスメント含めご支援いたします。ぜひご検討ください。

- ・IOWN®は、NTT株式会社の商標又は登録商標です。
- ・IOWN APN : IOWN All-Photonics Networkの略です。

株式会社 日立製作所 社会システム事業部

Borderless Data Share (BDS) 情報サイト <https://www.hitachi.co.jp/borderless/>